

## 『伝藤原為家筆 八雲御抄』について

### はじめに

本稿は平成二十九年九月八日～十月九日まで、春日井市道風記念館で行われた「特別展 藤井文庫 仮名古筆名品展」に展示され、同名品展の図録に掲載された『伝藤原為家筆 八雲御抄』についての報告である。

図録には、「もと冊子本の二十八頁を卷子本に改装したものである。表紙の題簽は烏丸光広の筆で、奥に大倉好斎の鑑定識語が付されている。宝玲文庫旧蔵。内容は八雲御抄第六用意部の内である。鎌倉中期の書写と考えられ、八雲御抄中で最古の可能性もある。」とあり、(縦247mm)と記されている。

鎌倉期中期から後期書写の『八雲御抄』伝本としては、文化庁保管の『伝伏見院筆本』<sup>〔1〕</sup>が知られるが、『伝藤原為家筆八雲

御抄』は、同時期の『八雲御抄』断簡として注目すべきものと思われる。

本稿では、二十八頁のうち、図版に載せられた十二頁分の翻刻と『伝伏見院筆本』など他の伝本との異同を記す。

当該箇所は、巻六のうち冒頭の論に続き、近代の和歌に許容できない六の様の次に、「すべて歌を詠むに思べき事、また六あり」<sup>〔2〕</sup>として記す六条のうち、

第一に風情をさきとすべき事

第二に心をさきとすべき事

第三に詞をさきとすべき事

第四に古歌をとる事

に続く二条にあたる、

第五に、てにをはといふ事

三 木 麻 子

から、

第六によくよく思惟すべき事

へと続く部分である。

図録掲載写真の一枚目分から十二枚目分に、仮に1〜12の番号を振って頁番号とした。一頁目の7行以外は一頁に8行が書かれている。

## 一 翻刻

### 八雲御抄 第六 用意部

#### 第五にてにをはといふ事

これはよくあしくとおもふへきにもあらず  
しくはかなはぬ事なれと てにをはのすこし  
たかひたるよりはそれをあはせんとたひてきこ  
えたるはまさりてわろし されはてにをはのさし  
あひたる事はたゝさてこそあらめ 清輔か うら吹  
かせにきりはれてやそしまかけてといへる哥」1  
は てもしさしあひたれとあしくもきこえ  
す このたくひこれにかきらすおほし わかみ

もくさにをかぬはかりといへるうたは いとしもなき  
人は をかぬはかりそなといふにや それはまたて  
にをはのやうをしらざるなり おほかた五いむ  
といふものかよひぬれはいづれもわたりてくるし  
からすといへとも又それもあしくいひつればみく  
るしたゝ哥よみうたよみならざるはかくのこと」2  
きの事也 たゝおなしことも一文字にてよくも  
きこえあしくもなるなり 又つゝ、けやうのあし  
さまにてもしうつりのみゝにたつことおほし か  
わのひしりかすゝめたるといひけんやうに ちか  
くも 月やとれとてやは袖のなといへるもしつゝ、  
き侍り これらほとこそなけれどもひとつものゝ  
名をふたくにひきゝりて つゝくることは上手  
のふつとせぬ事也 たきのいと見まほしけれと」3  
なともうけられす 又やまひの事は他巻に  
くわしくしるせり たゝ一文字の詞の字も  
はゝかりならへるもあり あへぬ しらぬなといへる  
の字はゝからすといへとも尤はゝかるへし 文字の  
たいあれはなり むかしせし いかに契しなといひ  
うかりしまゝに なりもしなまし おなしみや

こにありしかは こ、ちやはせしなといへる し文字  
はは、からす このたくひおほし 凡集などにはむ 4  
かしはさうにをよはす ちかき世のうたもやまひ有  
はおほし それをさらむと あしくはよみなすへからす  
よくいひよりなはやまひをいたむ事なけれ かく  
はいへともゑせうたのやまひさへあらむは又わろし

第六によく／＼思惟すへき事

さうなくよみたるま、にてはおのつからくやし  
きことありて後悔のやまひといふも八病のその

一なり よく／＼思惟すへきことなり た、しやすく 5

よまれんをす、ろにあむすへきにはあらず た、  
それも人の心によるへし もとよりよみたる哥より  
は、るかにおとりたるもよみいたしたるをりはよ  
きやうにおほゆるを又つきのひなとみるにこそみ  
さめはすめれ すこしはあむすへきこと也 俊頼抄に  
いはく 心とくめくる人は中／＼ひさしうおもへはあしう  
よまる、なり 心をそくよみいたす人はすみやかに  
よまむとするもかなはず 又かならずわろき事 6  
あり た、もとの心はえにしたかひてよみいたすへき  
なりといへり まことにをそくよまれむをとくよめと

をしふへきにあらず た、とくよまれんを猶あんせ  
よとなり 同抄に貫之は一首を十日廿日によみけると  
いへり それもたとへはのことにや 貫之毎度に十日廿日に  
よむにはあらし た、それもうたをあむするかよき  
事をいふ也 つらゆきか秀哥とてあるうたのやかて  
よみたる集ともにおほし た、あまりみちをふか 7  
くすへきやうを、しふるなり ちかくも保季 行能  
などていの哥人は当座も過日<sup>兼</sup>もた、おなしことなり  
けにも家にあてひくらしあむすともかなはさ  
らんことはちからなし た、ひとによりことによるへ

きことにてあるか 嘉応 菩提院入道 宇治にて

河水久澄といふ事をよませ侍けるにみな人哥を  
きてのちや、ひさしくまちけれとも 清輔一人うた  
をいたさす 座すみていかに／＼といひけれともあ 8  
まりにひさしかりければ さりとてはとてさうなか  
らとりいたしたりけるに いくよになりぬみつ  
のみなかみとはよめるなり それもあむしわつらへは  
こそひさしかりけれめ よきほとにていたしたら  
ましかなにのせんかあらん よく／＼こ、ろうへきこと  
なり た、しかく秀哥にてをそければこそをそき

もいみじきためしにはいへ みくるしき哥ならま  
しかはなにをかせむにせんくするところなにことも 「9

といひなから哥はた、心よりほかの事なきものな  
り かやうにこゝろへてよくくおもふへし わかこひは  
といひてすゑにその心とおらず あはれなりといひて

そのすゑにつやくあはれなる事もなきうたおほ

し すへてうたはこゝろえてよむへき事あるなり

いかなれは おほつかな、といふ五文字はけにもおほ

つかなき事なをいひたるはよし それかいともと

をらぬはゆ、しくみくるしきなり またよくもき 「10

こえぬ詞おほし さもこそは ものさひしかる ものわ

ひしかる おもふかな ものゆへに ものにそありける ある

と

おもへは いはまほしき せまほしき なになりなといへ

る詞はいとしもなし またあらましを してしかな み

てしかな、といふ事はつねの事なれとなとやらん

にくし きくはまことか あらんとすらんなども

またにくし おもほゆるかな 心地こそすれな

とは中くきやうしたるかたもありぬへし 「11

又下句に なに、有明の月といひはて なにを

まつかせそ吹なといへる めつらしからぬ秀句は  
むけのゑせうたよみかこのむ事なり 俊頼

か抄にいへることきの詞のなかに わひしかり

けり かなしかりけり へらなとはまことにさもとき

こゆ かも 見わたせは まにくなどはなにかはあ

なかちにくるしからむ 凡いつれのこととはも

つ、けからによるなり よき詞わろき詞と 「12

## 二 『八雲御抄』の本文について

『八雲御抄』の伝本は、久曾神昇氏によって、

(1) 「御初稿本 (御稿本)」

(2) 「御再撰本 (御精撰本)」

に分類され、現在、「稿本」、「精撰本」と称されている。

鎌倉中期から後期にかけての書写で全冊揃の『八雲御抄』として、現在最古と認められている『伝伏見院筆本』について、構造的には精撰本系に属しているが、本文については稿本系の内閣文庫本と一致する箇所が多いことを、当該書の解説で指摘した<sup>③</sup>。『伝伏見院筆本』は「細部には稿本系の本文を部分的に残している」状況である。『伝藤原為家筆 八雲御抄』は、時

代的に『伝伏見院筆本』に近いものであるので、『伝伏見院筆本』との比較が必要であると思われる。

また、数少ない稿本系の本文を有する『筑波大学附属図書館蔵本（以下、筑波大学図書館本とする）』（巻二のみは精選本系統）巻六が、翻刻された。<sup>③</sup>『筑波大学図書館本』の書写年代は江戸時代初期とされるが、『伝伏見院筆本』が稿本系本文と近い場合も多いことから、内閣本以外の稿本系本文として、併せて考察した。以上の二本は（注1）（注4）の翻刻によって比較した。

### 三 校異

『伝伏見院筆本（略号・伏）』および『筑波大学図書館本（同・筑）』と異なる『伝藤原為家筆 八雲御抄』の本文個所について、『八雲御抄の研究 名所部・用意部』<sup>③</sup>の翻刻に拠って、『国立国会図書館蔵本（国）』『宮内庁書陵部蔵伝細川幽斎本筆本（幽）』『宮内庁書陵部蔵本（書）』『国立公文書館蔵内閣文庫本（内）』との異同も併せて掲出した。先の三本が精撰本系統、内閣文庫本が稿本系の本文であることは既述のとおりである。

異同は、『伝藤原為家筆 八雲御抄』の頁番号と行数・本文を上げて、他本の状況を略号によって示すこととする。

伝為家筆本と同じ本文を持つ伝本は本文下の（ ）内に示した。

#### 1 頁

① 2 行 よくあしくと（伏内筑）…よくもあしくも（国幽書）

② 3 行 事なれと（伏国幽書内）…事なれは（筑）

#### 2 頁

③ 3 行 をかぬはかり（伏国幽）…をかぬはかりを（書）をか

ぬはかりそ（内筑）

④ 4 行 をかぬはかりそ（伏国幽書）…をかぬはかりを（内筑）

⑤ 6 行 いつれもわたりて（伏国幽書）…いつれもあたりて（内

筑）

#### 3 頁

⑥ 1 行 おなしことも…おなしことの（伏国幽書筑）

⑦ 2・3 行 あしさまにて（伏国幽書内）…あしきさまにて（筑）

⑧ 3・4 行 か「わのひしり…かはのひしり（伏国幽書）…か

はかのひしり（内筑）

⑨ 4 行 すゝめたと（伏国書内）…すゝめたりと（幽）すゝ

めると（筑）

⑩ 7 行 ふたくに（伏国幽書）…ふたつに（内筑）

#### 4 頁

⑪ 3行 あへぬ（伏内筑）…あらぬ（国幽書）

⑫ 8行 凡集などには（伏国幽書）…凡集などに（内筑）

5頁

⑬ 1行 さうにをよはす（幽書筑）…さうにをよはす（伏

さらにをよはす（国内）

⑭ 3・4行 かく」はいへとも（伏国幽書内）…かくいへ共（筑）

⑮ 6・7行 くやし」きことありて…くやしきこともありて（伏

国幽内筑）くやしきこともあり（書）

6頁

⑯ 1行 よまれんを（伏国幽書内）…よまむを（筑）

⑰ 1行 へきにはあらず（伏国幽書内）…へきにあらず（内筑）

⑱ 3行 をりは…おりは（伏国幽書）時は（内筑）

⑲ 7行 人は（伏国幽書）…人（内筑）

7頁

⑳ 7行 うたの（国幽書内筑）…哥（伏）

8頁

㉑ 6・7行 哥を」きて（伏国内筑）…歌いてきて（幽）歌を

きゝて（書）

㉒ 8行 座すみて（伏国幽書）…ナシ（内筑）

9頁

㉓ 1行 ひさしかりければ（伏国幽書）…久なりければ（内筑）

㉔ 2行 たりけるに…たりけるに（伏国幽書内筑）

㉕ 3行 それも（伏書内筑）…これを（国幽）

㉖ 4行 こそひさしかりけれめ…こそひさしかりけれ（伏国幽

書内筑）

㉗ 6行 たゝし（伏国幽書）…ナシ（内筑）

㉘ 6行 をそぎ（書内筑）…をそぎ（伏国幽）

10頁

㉙ 3行 すゑに…そのすゑに（伏国幽書内筑）

㉚ 5行 すへてうたはこゝろえてよむへき事あるなり…すへて

哥には心えてよむへき事のあるなり（伏国幽書内筑）

㉛ 6行 おほつかなゝと（伏国）…おほつかなし（幽）おほつ

かなくと（書内筑）

㉜ 7行 事などを（伏書）…事を（国幽内筑）

11頁

㉝ 2・3行 ものにそありける あると」おもへは いはまほ

しき せまほしき なになりなと（書内筑）…ものにそ

ありける あるとおもへは いはまほし せまほしき

なになりなと（国幽）ものにそありけるなと（伏）

㉞ 4行 してしかな（国幽書内筑）…してしかな（伏）

③5 4・5行 「み」てしかな」と(伏国幽書) …みてしなと(内筑)

12頁

③6 1行 なに> (伏書内筑) …なに(国幽)

③7 1行 有明の月と(伏国幽書内) …有明と(筑)

③8 4行 いへることきの(伏) …いへる かくのこときの(国幽書) いへる(内筑)

限られた範囲であるが、『伝藤原為家筆 八雲御抄』は『伝伏見院筆本』と近い本文であることが解る。『伝伏見院筆本』と異なるのは、『伝為家筆本』以外は全て『伝伏見院筆本』に一致する⑥②4②6②9③0のような『伝為家筆本』の独自の誤り、もしくは、誤りではなくとも一本だけが持つ本文である。

また、一方で『伝伏見院筆本』が他の全ての伝本と異なる②0③3③4のような『伝伏見院筆本』の独自の誤りと思われる場合がある。

しかし、それ以外は、③④⑤⑧⑩⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿などのように、『伝伏見院筆本』や他の精撰本系の本文と一致して、稿本系統の『内閣文庫本』や『筑波大学図書館本』と対立している、精撰本系統の断簡である。

『伝伏見院筆本』とは異なっても、②8のように稿本系本文を

残していると思われる個所も見受けられ、『伝藤原為家筆 八雲御抄』の全貌に触れる機会が望まれる。

(注)

(1) 『八雲御抄 伝伏見院筆本』(片桐洋一監修・八雲御抄研究会編・和泉書院・二〇〇五年)に、翻刻紹介。

(2) 引用本文は注1の翻刻により、適宜濁点を施した。

(3) 注1に同じ。解説は、吉田薫・三木麻子。

(4) 寺島恒世氏「稿本系『八雲御抄』の本文について―筑波大学附属蔵本巻六「用意部」翻刻―」(『国文学研究資料館調査研究報告』34・人間文化機構国文学研究資料館・二〇一四年三月)。寺島氏には「八雲御抄の本文の改訂―筑波大学附属図書館蔵本の紹介を兼ねて―」(『かがみ』44・大東急記念文庫・二〇一四年三月)にも筑波大学図書館本の紹介がある。

(5) 片桐洋一編・阪口和子・吉田薫・三木麻子他9名著・二〇一三年・和泉書院。

(みき あさこ)／神戸教育短期大学学長)